

空



2017・6・7

**SORA** 73号

北九州 河原敬子

国東の僧集まりて春の舞  
春光や壁画の浄土薄れしも  
磨崖仏へ磴荒々し落椿  
奉納の護摩木を背負ひ峯入行  
内陣に護摩火の高し春障子

東京 今井康子

降り立てばどこか懐かし木の芽風  
塩入れて貝動きだす春の夕  
春星をしばし眺めて吹かれをり  
春満月へ首伸ばしたるキリンかな  
蛙鳴く犬の太郎は気にもせず

北九州 横田敬子

春夕焼ベツドの母を横向きに  
お彼岸の団子作れと祖父の声  
野火消えてゆつくり戻る消防車  
玄室に貴婦人出でし春の夢  
佐保姫の眠りし棺かもしれぬ

宮崎 田代民子

起きしなの雨となりたる桜かな  
綿菓子の際時にしなふ春北風  
這ひはひの嬰もまじへたる花筵  
散るさくら一心に浴び六地藏  
朝夕の梵鐘に閑け葱の花

東京 遠山のり子

敷石に歩幅を合はす花日和  
渋滞の中にもしきり飛花落花  
大得意ふらここ高く高く漕ぎ  
組分けは花の名前で入園す  
永き日の公園ライブ大きな輪

京都 天谷翔子

春昼を灯して京の骨董屋  
忘れずをりかの雛のうすまぶた  
すつぽりと髪の抜けたる雛かな  
婆ばかり寄り桃の酒雛あられ  
むらさきの紐ゆるやかに雛納

直方 吉田悦子

酒蔵のレンガ煙突雪しぐれ  
老いし母に貰ふへその緒冬すみれ  
身の丈に合はぬ恋なり寒椿  
母と娘の話は尽きず春の宵  
辻褄の合はぬ言ひ訳花粉症

神奈川 窪みち子

桃咲きて墓地の華やぐ日なりけり  
浅蜷飯写真の人と向き合うて  
杏咲く安曇野の峰まだ白し  
山葵漬遺影にも見せ卓に置く  
ベイブリッジ春の海光はね散らす

福岡 亀井紀子

満々と声たくはへて猫の恋

野良はまた野良を産みけり猫の恋

陣痛を知らぬ軀よしやぼん玉

春風や夫唱婦隨の旅をして

赴任地へ続く川なり花筏

福岡 樋口みぶ

夕暮の雲流れだす酸葉かな

実桜や一字薄れし百度石

母の日のわれも母なり卓を拭く

商店街の魚屋が好き燕の子

支柱立て実直な夫胡瓜植う

粕屋吉田 葎

合戦の海は凧ぎたり夏料理

草の王百歩あゆめばまた古墳

万緑や謳ふがごとく古墳群

雷鳴の縦横無尽大八洲

神前に名前ぎつしり椎の花



空集抄  
柴田佐知子抽出

花冷や服に遺りし母の髪

曾根富久恵

二度三度波立たせ敷く花筵

岸 洋子

縁側に父ははの居る春の夢

高倉和子

死の匂ひ消えし玄室すみれ咲く

深川淑枝

母の雛母の柩を見送れり

岩下きぬ代

しなやかに鯉すれ違ふ花の昼

田代貞香

山窪に張りつく一戸種浸

永淵恵子

風光るあつと言ふ間に着く渡舟

中田みなみ

啓蟄や古き都は土の中

青木朋子

エプロンで濡れ手つつめば初音かな

原 友子



鮫鱈を引きずり下ろす台秤

否応なく風吞まさるる鯉幟

饒舌は嫌ひなのです沈丁花

野良猫が飼ひ猫になる麦の秋

秘め事はいつしか薄れ髪洗ふ

己が影ふはりと蹴つて鶴発ちぬ

佛壇の大きな家や山桜

花ふぶく乳母車より小さき掌

胸へ両手眠ればフアラオさくら降る

霜の夜夫の余命を恐れけり

春渚駆け出しさうな靴一つ

雛祭稚は晴着に埋もれて

極楽を見てきたやうに涅槃僧

千波 悠

秋 千晴

田岡千章

苑 実耶

小林朱夏

角野良生

山本則男

山田正子

織田高暢

吉田悦子

井上和子

宮井知英

見玉充代

家出して蜜豆食べただけのこと

山内 碧

古来種は脇にやられて植木市

古賀 眞理

大滝のしぶきは天へ還りゆく

あさなが 捷

柳鮠へ橋より垂るる地獄網

河原 敬子

高き樹にたかき囀り暮れなづむ

田代 民子

たんぽぽや乳母車より犬の貌

天谷 翔子

応ふるはいつも一言種物屋

林 徹也

みづうみの見ゆるところに春炬燵

えとう 樹里

北方へ首を伸ばせる残り鴨

押田 裕見子

子雀の小首かしげてかく近く

岩井 京子

髪ほどく畳に花の二三片

大西 乃子

寒鼻吾も詩人となれるかなあ

村上 典子

しばし蚊のしづかなることなほ憎し

宮川 正彦



てのひらに包んでみだし春の月

うぐひすの声に目覚めし転居の地

白波はレース編むごと春の海

彼岸寺見知らぬ人に一礼し

楽しくて少し騒がし雛祭

蒲公英の絮をさな児を待つてゐる

鶯の声に口笛もて応ふ

花びらを払ひてたたむ花筵

いくつかはまだ息づける落椿

蒼穹へ嫁入りのごと辛夷咲く

橋にもたれ今日も眺むる残り鴨

冷索麵てこでも動かぬ父ありし

夏近し背筋伸ばして歩け歩け

窪みち子

畑 由子

清水量子

柴田志津子

遠山のり子

仲里奈央

石井みゆき

桐山 甫

岡村尚子

田中素直

三輪敏夫

吉田 稗

後藤園子

# 空作品評

柴田佐知子

## 花冷や服に遺りし母の髪

曾根富久恵

亡くなった母への心情をそのまま述べられると、作者の思いを押し付けられたような印象が残るだけに終ることがあるが、掲句のように〈服に遺りし母の髪〉と具体的に表現すると俳句の力が發揮される。母の衣に母の髪を見つけたときに蘇る母の姿。そして母の永久なる不在：一瞬に作者の胸中に湧きあがってきたであろう思いが伝わってくる。

## 縁側に父ははの居る春の夢 母の雛母の柩を見送れり

高倉 和子  
岩下きぬ代

この一年、何人かの方が父上や母上をなくされた。一句目、父と母が居るだけで幸せだった穏やかな日々。目覚めた時の一人っきりの静けさが切ない。

二句目、母と歳月を共にしてきた母の雛が飾られている季節に亡くなられたのである。雛の静かな眼差しと作者の悲しみが重なってくる。

## しなやかに鯉すれ違ふ花の昼

田代 貞香

餌に群れているときは別だが、水中で鯉たちは確かにしなやかにすれ違っている。満開の桜が鯉の水に影を映しているかもしれない。一幅の絵のような句である。

## エプロンで濡れ手つつめば初音かな 原 友子

きりきりと働いている最中かもしれない。エプロンでちよつと濡れた手を拭おうとしたときに、初音を聞き留めたのだ。暫くはその姿のまま動かずに聞いて君られたのではなからうか。早春の一瞬が鮮やかに切り取られている。

## 秘め事はいつしか薄れ髪洗ふ 小林 朱夏

どのようなことも、過ぎゆく時間の中で変容していく。あれほど強く秘そうと思ったことも記憶の奥へと移っていく。秘め事の内容は勿論秘められたままでうかがい知ることはできないが、艶な情緒が漂う。へ髪洗ふという季語によってもたらされる情感であろう。

# 空集

柴田佐知子選

金箔の雛の屏風に雛の影

福岡 曾根富久恵

喪主の押す茶毘のスイツチ花いまだ

母の手を曳いて消えたる花女郎

中空にまだ母のある花明り

花冷や服に遺りし母の髪

母逝きて白百合の香のあるばかり

さくら餅店の中まで石畳

福岡 岸洋 子

水底に届く明るさ百千鳥

目高の子目玉ばかりが育ちけり

治癒力を医師に褒められ鱒叩く

もの芽出て転ばぬことに疲れけり

二度三度波立たせ敷く花筵

行く方を竿でうながし雛流す

福岡 高倉 和子

水音のくぐもる橋や木の芽時

縁側に父ははの居る春の夢

ままごとに犬も座りてあたたかし

春祭終りて燃やすもの多し

木の洞の中に住みたき五月かな

さざなみは湖をあふれぬ鳥の恋

北九州 深川 淑枝

死の匂ひ消えし玄室すみれ咲く

穴を出し蛇の濡れ身の日にほぐれ

かげろふや石詰められし城の井戸

春の雪自刃の数の野の仏

城跡や夕東風過ぐるふくらはぎ

独り居を雛とゆつくり楽しめり

直方 岩下きぬ代

耕せり黒々と地を広げつつ

病床の母に歌ひし早春賦